

戦略的創造研究推進事業

(社会技術研究開発)

平成29年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」  
研究開発領域

研究開発プロジェクト

「空き家活用によるまちなか医療の展開と  
まちなみ景観の保全」

研究代表者 後藤 春彦

(早稲田大学大学院創造理工学研究科 教授)

## 目次

1. 研究開発の実施内容 .....	2
1 - 1. プロジェクトの達成目標.....	2
1 - 2. ロジックモデル .....	5
1 - 3. 実施方法・内容 .....	6
1 - 4. 研究開発結果・成果.....	9
2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....	14
3. 研究開発実施体制.....	15
4. 研究開発実施者 .....	15
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など .....	20
5 - 1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	20
5 - 2. 論文発表 .....	22
5 - 3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	22
5 - 4. 新聞報道・投稿、受賞等.....	22
5 - 5. 知財出願.....	22

## 1. 研究開発の実施内容

### 1 - 1. プロジェクトの達成目標

#### (1) 全体目標およびリサーチ・クエスチョン

○本提案では、少子高齢化などに起因するまちづくりの人材不足を背景に、重要伝統的建造物群保存地区である奈良県橿原市今井町において、「まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存」をまちづくりのビジョンとして掲げ、今井町に隣接する奈良県立医科大学（以下奈良医大）のナレッジとヒューマンリソースを活用し、「まちも元気に、ひとも元気に」をめざす社会実験の場とする。

奈良医大の機能とノウハウを今井町に埋め込んでいくことで、まちなか医療を核とした地域の健康基盤の実現をめざし（「ひとも元気に」）、その過程で町並みを整え、まちづくり人材を育むことで、内発的な景観まちづくりの素地を再強化する（「まちも元気に」）という、「ひと」と「まち」の健康を同時に向上させる好循環の仕組みを作り出すことをビジョンに掲げている。

○プロジェクトの達成目標としては以下の4点を掲げている

目標①：住民自治の土台となるオーラルヒストリーの編纂

目標②：ICTを活用した独居等高齢者のための健康見守りシステムの開発

目標③：空き家の適切な利活用促進のためのTMO設立

目標④：医大生まちづくり組織設立

○ビジョンの実現に向けて継続的なまちづくりをめざすなかで、以下の2つのリサーチクエスチョン（RQ）を設定している。

➡[RQ1] 多世代共創によってまちづくりに取り組む際に、ソーシャルキャピタルの成熟度をいかに可視化しその程度を計量化することができるか？ またそれをもとに「まちづくり知」をどのように蓄積し、「活動の継続と改善」「暗黙のノウハウの一般化」に活かすことができるか？

（→領域RQ7「世代共創の程度や多世代型ソーシャルキャピタルに関する指標」に対応）

➡[RQ2] 多世代（特に若い世代）のまちづくり活動への参画深化プロセスと動機付けにはどのようなものがあるか？ 参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」とはどのようなものか？

（→領域RQ2「若い世代の参加動機付け」、領域RQ3「参加の制度化」に対応）

#### (2) 平成29年度の目標

今年度の達成目標① “オーラルヒストリー”の編纂と配布

今年度の達成目標② 地域高齢者の“健康見守り”モデル構築

今年度の達成目標③ 重伝建地区における“空き家利活用”の仕組み構築

### (3) 背景

○重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の制度設計のモデルとなった奈良県橿原市今井町は、住民の自治により長年町並み保存に取り組んできたが、近年以下のような課題を抱えている。

- ①町並み保存運動から約四半世紀が経過し代替わりの時期を迎え人材不足に陥っている。
- ②住民の高齢化がすすみ、独居老人や身寄りのない高齢者が増加している。
- ③空き家が増加し、その数は82件に達し、町並み景観への影響が深刻化している。
- ④コミュニティの希薄化により、木造市街地の防災力の低下が懸念されている。

○こうした問題は全国的に見られる現象であるが、特に今井町は重伝建であるがゆえに、都市更新に対して多くの規制がかけられていることがボトルネックとなり、とても深刻な状況にある。こうした状況に対して本提案は、「まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存」を今井町のビジョンとして掲げ、今井町を「まちも元気に、ひとも元気に」の実現をめざす社会実験の場とするものである。

### (4) 具体的地域像と達成指標

#### 【具体的地域像】

身近なまちなかの「“医”の<居場所>」づくりと「お互い様」コミュニティの強化

後藤PJは、「まちも元気に、ひとも元気に」を合言葉に、縮減社会の到来により増加している空き店舗や空き家の利活用により、あらたな医療・介護の舞台として、多世代のための「“医”の<居場所>」を地域社会につくることをめざしている。また、そこを拠点として、医療従事者と患者のみならず健常者も含めた多世代による「お互い様」のコミュニティを充実させることで、ひとびとの絆を深め、多様性と包摂性の確保を可能とし、信頼に足る生活の質を獲得することをめざしている。

#### 【達成度を測る指標】

##### A「まちも元気に」

(一般社団法人) まちづくり会社の設立と運営

- ①まちづくり会社の設立
- ②まちづくり会社による空き家の改修
  - ・改修へのコミット数
- ③まちづくり会社と地域社会との連携によるまちづくり体験イベントの開催
  - ・参加者数

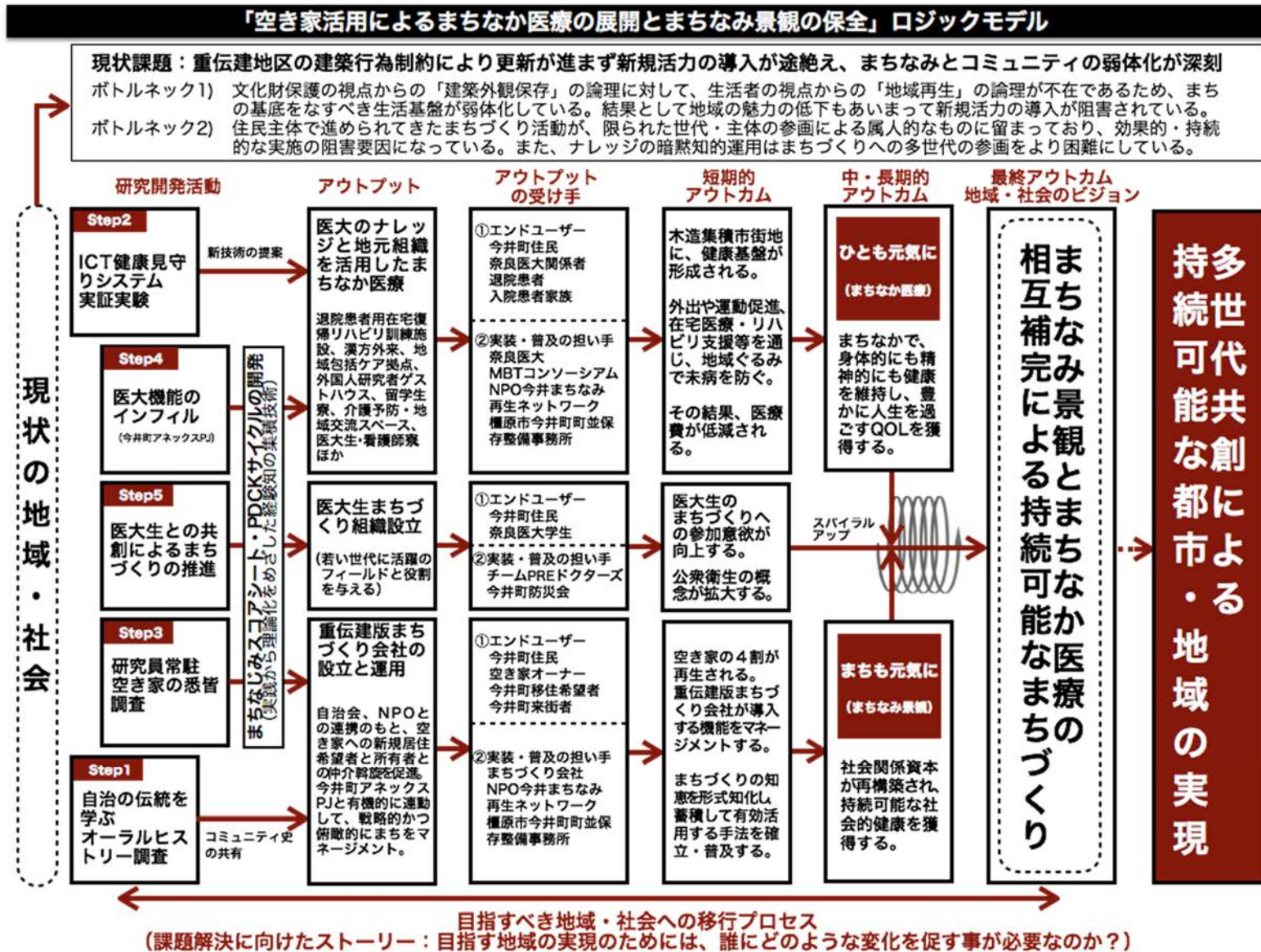
- ・地域社会のまちなみ景観への関心向上の度合い

## B「ひとにも元気に」

医大（医師・医療介護専門職・医大生）、今井町在住の看護師・栄養管理士・介護士・東洋医学の専門家などとの協働による、改修された空き家（まちや館別館、早稲田大学MBT研究所今井町分室）を活用した「“医”の＜居場所＞」におけるヘルスプロモーションの実施。

- ① 健康ステーション（週1回程度）…来訪者の健康測定（セルフ）
  - ・参加者数
  - ・参加者の健康状態の推移
- ② 健康教室（月に2-3回程度）…運動やレクリエーションなど介護予防活動
  - ・参加者数
  - ・参加者の健康状態の推移
- ③ 健康カフェ（月1回程度）…医大生による健康見守り
  - ・参加者数
- ④ 医大と企業の連携によるICT・IoTを活用した健康見守り
  - ・サービス加入者数
  - ・見守りネットワークの範囲

1 - 2. ロジックモデル



### 1 - 3. 実施方法・内容 (1) 実施項目の全体像

本プロジェクトの主眼は、(1) 多世代のための“医”の居場所づくりを核としたまちなか医療の展開および“縁”ネットワークの再構築(「ひとも元気に」)と、(2) まちなみ景観の保全・修復(「まちも元気に」)を、一体的に達成することにある。プロジェクトの全体像を図1に示す。本研究の実施項目は、大きく4つに分類され、それぞれがプロジェクトの達成目標①～④に対応している。

「住民自治の土台となるオーラルヒストリーの編纂(目標①)」は、地域特有の歴史・資源・課題を発掘し形式知化することを通して、まちなみ景観の保全・修復に寄与する。

「ICTを活用した独居等高齢者のための健康見守りシステムの開発(目標②)」は、医大・医療従事者のまちなか医療への参画を通じて“医”の居場所づくりに寄与するほか、医大機能のまちなかへのインフィルを通じてまちなみ景観の保全・修復に寄与する。

「空き家の適切な利活用促進のためのTMO設立(目標③)」は、住民主体の担い手組織を育むものであり、“縁”ネットワークを再構築しつつ“医”の居場所づくりを主体的に推進するほか、不動産利活用を中心としたエリアマネジメントを通してまちなみ景観の保全・修復に寄与する。

「医大生まちづくり組織設立(目標④)」は、医学生など若者層を中心とした「医・健康」「まちづくり」に対する潜在的参加意欲を刺激し、プロジェクトに巻き込んで、“医”の居場所づくりに寄与する。

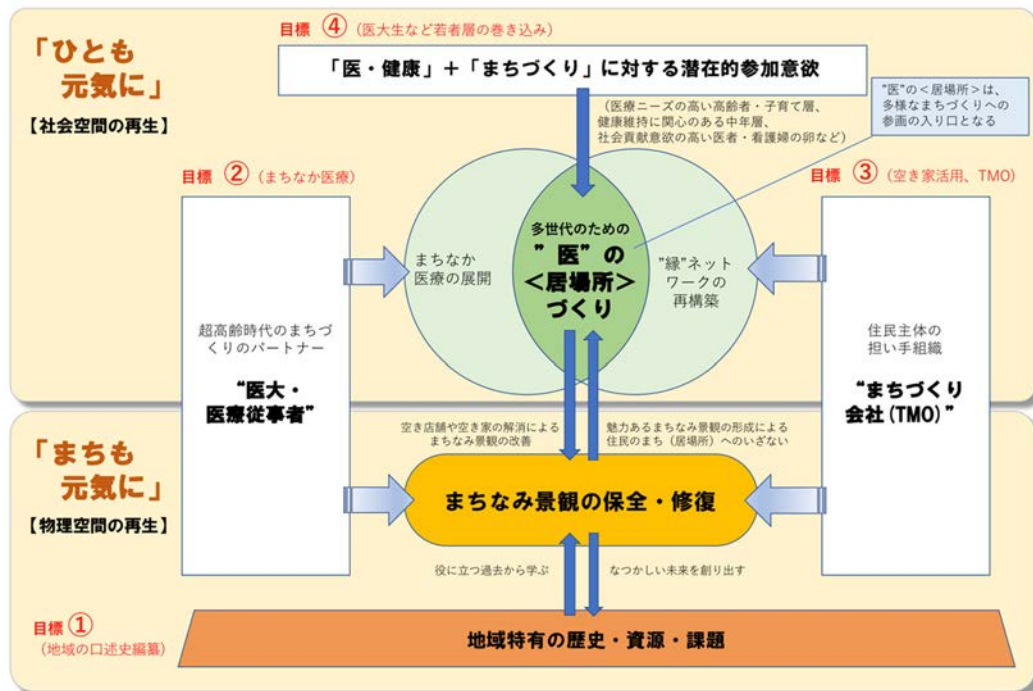


図1 プロジェクトの全体像

## (2) 各項目の実施内容

今年度の到達目標① “オーラルヒストリー”の編纂と配布

実施項目①-2：“オーラルヒストリー”の編纂と配布（成果冊子の配布）

編纂したオーラルヒストリー冊子の内容を、地元組織（まちなみ保存会等）の協力を得て修正を重ねて確定したうえで、製本して全戸配布した。また、今後オーラルヒストリーで得られた成果をどのようにまちづくり・地域のイベント等に活用できるのかについて、地元組織と協議を進めた。

今年度の到達目標② 地域高齢者の“健康見守り”モデル構築

実施項目②-1：高齢者の健康見守りシステム開発

今井町内の研究推進拠点（早稲田大学今井町分室）に、レーダー方式を採用した「生活見守りセンサー」を設置し、モニタリング実験を実施した。加えて、タッチパネル操作で毎日の健康状況のデータを蓄積し、生気象学に裏付けされた健康アドバイスを発信し、日々の健康を見守る「健康みはり」のプラットフォーム開発を行った。

また、IoTデバイスの各種センサーを用いて血圧に強く影響する気圧変動を含む室内環境データを収集し、健康状態の変化のアラートや健康アドバイスを医療機関から提供するゲートウェイ装置「MBT Link」の開発を行った。

実施項目②-1’：台湾ICT事例調査

「地域高齢者の“健康見守り”モデル」の類似システムの海外先進事例として、ICTを活用した住民の健康サポートに関する社会実験が進んでいる台湾の事例を対象に視察を行った。具体的には、医療用データマネジメントシステムなどを開発・販売する会社にヒアリング調査、ICTを活用して連携している病院およびコミュニティ施設の見学を行った。

実施項目②-2：ヘルスリテラシー・セルフメディケーション向上の評価

高齢者の健康見守りシステムが、単に健康見守りだけでなく、それを活用している住民（被験者）のヘルスリテラシーやセルフメディケーション習慣の向上にも寄与するかどうかという点を検証するため、「健康みはり」システムに関する利用状況データを分析した。具体的には、被験者に歩数計を渡し自主的に健康データの蓄積と管理を行わせたユーザデータに関してその後の利用状況を分析した。

今年度の到達目標③ 重伝建地区における“空き家利活用”の仕組み構築

実施項目③-1-1：空き家の調査

各区長に対するヒアリング調査を実施して、「空き家予備群」の洗い出しとマッピングを行った。また、複数の町家を所有している所有者に対して、現在所有している建物と活用状況（空き家・賃貸・自身で活用）を把握し、空き家の発生過程や今後所有している建物に対する利用意向調査を実施した。

実施項目③-1-1’：アクティビティ調査

街路特性、周辺市街地との位置関係、施設立地などによる影響があることから、一



言に今井町といっても町内の土地の特性は様々である。そうした特性を把握することは、今後空き家活用やまちづくりの方向性を探る上で重要であると考えられる。そのため、一日を通じた巡回定点観測によって今井町内のすべての道路における通行量、通行者、行動の変化を把握し、今井町内の土地特性を把握した。

#### 実施項目③-1-2：重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

空き家活用を担う「TMO」の設立に関しては、平成29年7月より勉強会を開催した。NPO、不動産・建築系事務所、まちの旦那衆、地元の銀行、地元自治体現地事務所（オブザーバー）と計11回の協議を重ね、平成30年6月頃に一般社団法人「do-ma」を設立する目処が立つに至った（図2）。またTMOがコミットする空き家の候補として9軒をリストアップし、利活用のあり方、会社としての資金の回し方等の検討に着手している。

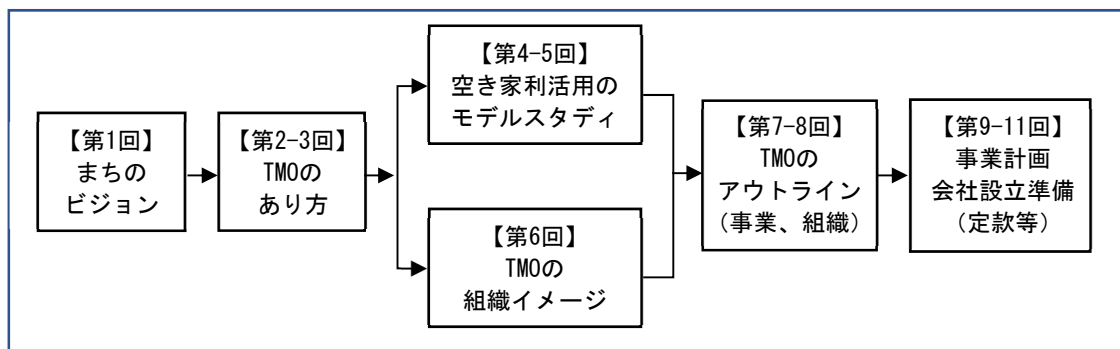


図2 勉強会の流れ

#### 実施項目③-2-1：「今井町アネックス」プロジェクトハード事業推進

今井町内の長屋を借り研究推進拠点「早稲田大学 医学を基礎とするまちづくり研究所 今井町分室」として活用を始めた。また医大生のまちづくりへの参画促進や「まきこみプロセス」に関する知見獲得のため、同拠点を中心に奈良県立医科大学の学生とコラボ企画を複数回実施した。さらに医大の機能や知見、人材の今井町内での活用推進に向け、空き家を改修し「奈良県立医大今井町ゲストハウス」を開所した。

#### 実施項目③-2-1'：まちなじみ調査

多世代(学生に限らない)の定着過程を検討するため、重伝建選定後の新たな住民・事業者、「まちなじみ」の実態に関するヒアリング調査実施した。対象者は、比較的最近今井町内に引っ越してきた住民または事業者で、計25名である。また、「まちなじみ」のプロセスを疑似体験するロールプレイを通して、まちづくりについて考える住民ワークショップを2回実施し、住民、関連事業者とともに議論を行った。

#### 実施項目③-2-1”：「多世代共創型まちづくり」海外先進事例の調査・分析（台湾）

「多世代共創型まちづくり」の先進事例として、住民に限らない人々による住環境向上のための空間整備・活動を支援する台北のOpen Green事業に着目し、その成果を現地コンサルタント、住民らの案内のもとで複数視察した。またOpen Green事業を管

轄する台北市都市更新局およびアドバイザーの連振佑氏（中原大学景観学系助理教授）とのディスカッションをおこなった。

## 1 - 4. 研究開発結果・成果

### (1) 明らかになったこと

[RQ1] 多世代共創によってまちづくりに取り組む際に、ソーシャルキャピタルの成熟度をいかに可視化しその程度を計量化することができるか？ またそれをもとに「まちづくり知」をどのように蓄積し、「活動の継続と改善」「暗黙的ノウハウの一般化」に活かすことができるか？

回答：新規居住者の定着過程は＜社区＞＜社群＞の集団類型を用いて表現可能である。また地域の記憶や知恵を「口伝の歴史」として編纂したオーラルヒストリーは、新規住民と旧来住民、老年世代と若年世代などが、垣根を超えてまちづくりについて考え、議論し、関与を深めるための「媒体」として有効である。

[RQ2] 多世代（特に若い世代）のまちづくり活動への参画深化プロセスと動機付けにはどのようなものがあるか？ 参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」とはどのようなものか？

回答：働き盛り世代がまちづくりに参画する際に、最大の障壁になっているのは、硬直化した既存の地縁コミュニティである。そうした中、テーマ縁などを介した新たな開放型コミュニティの萌芽が見られ、彼らは弱体化したコミュニティの新たな担い手として期待される。また、そうした人々の定着過程には、「世話役の存在」などを介在した、いくつかのクリティカルパスが存在する。

また健康見守りシステムの地域実装においては「プライバシー確保」が大きな課題となる。通常時秘匿されている情報を非常時に活用するにあたっては、(1) どのように「非常」判断を行い、(2) 「だれがどこまでの」情報提供を受け、(3) 「どのように行動するのか」という、「かけつけ」を実現する地域ぐるみの仕組みづくり、それに対するインセンティブ設計（ビジネス化、共助の仕組み化など）が課題となる。

### (2) 各項目の成果

今年度の到達目標① “オーラルヒストリー” の編纂と配布

実施項目①・2：“オーラルヒストリー” の編纂と配布（成果冊子の配布）

今井町自治会の協力を得て今井町環濠内における成果冊子配布を実施し、その結果448世帯に冊子（図3）を届けることができた。配布以降「早稲田大学 医学を基礎とするまちづくり研究所 今井町分室」に来訪した複数の住民から好評な反応を得ており、また一部住民間で多世代の交流を誘発していることが観察から把握された。さらに今井町内の地縁組織からも活用に関する積極的な意向を把握することができた。



図3 編纂した冊子

## 今年度の到達目標② 地域高齢者の“健康見守り”モデル構築

### 実施項目②-1：高齢者の健康見守りシステム開発

設置したレーダー方式の「生活見守りセンサー」（写真3）、赤外線方式のセンサーと比較して、検知の途切れが低減されること、プライバシー確保が容易であることなどのメリットが有ることが分かった。一方、精度や正確さに関するデメリットも把握された。また、タッチパネル操作で毎日の健康状況のデータを蓄積し、生気象学に裏付けされた健康アドバイスを発信し、日々の健康を見守る「健康みはり」のプラットフォーム開発を行うとともに、このプラットフォームをヘルスリテラシー・セルフメディケーション向上の評価の分析(実施項目②-2と関連)に使用した。

さらにこれまで蓄積してきた室内環境情報および生体情報を解析した結果、血圧は気圧により最も影響を受けることが分かった。この知見を活かし開発したMBT Link（図4）は、「健康みはり」の技術も含めて活用し、室内環境データの常時モニタリングを可能とするとともに、特に高血圧の方には気圧変動時および事前の変動予測による早期アラートの通知が可能となる点に特徴がある。



写真3 設置した「生活見守りセンサー」とデータ蓄積用のデバイス



図4 開発したMBT Link

#### 実施項目②-1' : 台湾ICT事例調査

台湾ではヘルスプロモーションの一環として、社区（地縁コミュニティ）のコミュニティスペースへの健康測定器具（体重・血圧計など）の設置が進んでいることがわかった。視察した竹山秀伝病院では、家庭内のセンサーや地域拠点から送信されたデータによって、住民の健康状態の異常を検知し、対応するシステムを構築していた。異常検知時の対応については、住宅への侵入などプライバシー上の課題が発生するが、この事例では異常事態を深刻度合いに応じてレベル分けし、それぞれ親族への通報、親戚への通報、そして病院からの駆けつけという対応を取るようにする事、またシステム利用登録時に高齢者から緊急時の駆けつけへの同意をとることによって、その課題を解決している事がわかった。

また、コミュニティスペースに健康測定器具を設置することで、ヘルスリテラシー向上とともに特に社会的に孤立しがちな高齢者の社会的健康に対するケアを継続的に実施する仕組みとしても機能している。

#### 実施項目②-2 : ヘルスリテラシー・セルフメディケーション向上の評価

被験者に歩数計を渡し自主的に健康データの蓄積と管理を行わせたユーザデータに関してその後の利用状況を分析したところ、積極的に歩数計を活用しデータ管理を行った被験者は全体の39%であり、一部に日々の運動量増加によるセルフメディケーションの向上を認めた。

#### 今年度の到達目標③ 重伝建地区における“空き家利活用”の仕組み構築

##### 実施項目③-1-1 : 空き家の調査

今井町街並整備事務所、NPO法人今井街並再生ネットワーク、自治会の各区長を対象としたヒアリング調査を基に、「空き家」、「空き家予備群」だけでなく、倉庫・物置としてのみ使用されている「半空き家」を洗い出し、マッピングを行った。

また複数町家の所有者に着目した調査からは、町家の所有数に応じて所有する町家の管理に対する課題が異なることが把握された。具体的には大規模所有者の場合は町家改修などに耐えうる資金力があるものの、小規模所有者の場合は家賃収入が少なく、また物件売却も困難な場合が多いため、総じて町家の適切な管理が難しく、町並

保全上の課題となりやすいことが明らかとなった。

### 実施項目③-1-1' : アクティビティ調査

巡回定点観測によって合計で736人の路上アクティビティを把握した(図5)。それらの分布からは、蘇武橋周辺、共栄町周辺、南御堂町周辺、大工町周辺などにアクティビティ(通行含む)が集中していることが分かった。また住民は比較的まんべんなく通行が見られたが、観光客は蘇武橋町周辺や南御堂町周辺に集中しているなど、年齢や観光客/住民、時間帯による分布の差も確認された。

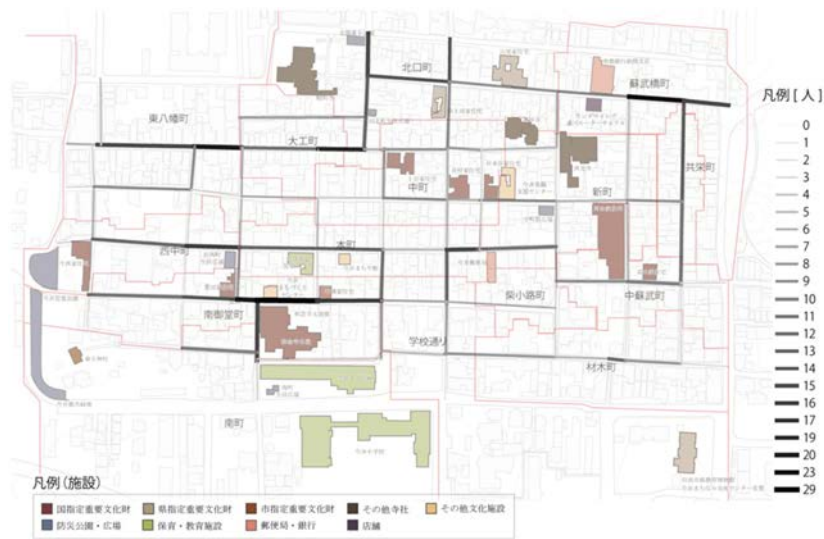


図5 アクティビティの分布

### 実施項目③-1-2 : 重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

TMO設立の目処がたった。なおこの設立にあたっては、地元住民(働き盛り世代)が代表理事を務め、設立時社員4名は地域外のメンバーで構成する体制を構築した。TMO自体は、テーマ縁などを介した新たな開放型の組織とし、地域のしがらみにとらわれない形とする一方で、まちの旦那衆(地縁コミュニティ)等が参画するアドバイザー・ボードを設置し、まちづくり事業の進め方等について、適宜意見を求める体制を構築する予定である。これにより、開放型コミュニティと地縁コミュニティのハイブリッド型の新しい組織の構築を試みている。

### 実施項目③-2-1 : 「今井町アネックス」プロジェクトハード事業推進

具体的な空き家活用、医大生のまちづくりへの参画支援を実施することができた。また医大生とのコラボ活動からは「まきこみプロセス」に関する知見が獲得できた。具体的に、まずh28年度に示唆された若年層のまちづくり活動への参画促進策としての拠点確保が、本年度の活動を通じて有用であることが実証された。またそうした若年層の受け入れに当たり、若年層の興味に合致した住民・事業者がおり「テーマ縁」を生み出すことが、まちづくり活動への参画を促すことが推察された(今年度実施したコラボは、奈良医大の「東洋医学研究会」、学習塾運営を行っている「チームPREドクターズ」とともに実施したが、前者に対しては漢方関連事業者の存在、後者に関し



ては教育への関心を持つ住民・事業者の存在が「テーマ縁」を創出したと言える）。

実施項目③-2-1' : まちなじみ調査

「まちなじみ」のプロセスを可視化する手法を構築することに成功し、そのなかで住民がまちづくりに参画するクリティカルパスが複数明らかになった。具体的には「まちなじみ」を「きっかけ」という要素に分解すると共にその「きっかけ」の要素として<社区><社群>といったきっかけを媒介する人々の分類と、「参加段階」という2指標を整理することで可視化を行った。またそのことで「まちなじみ」にプロセスを17整理すると共に（図6）、新規店舗店主通しの集まりや移住促進活動を実施するNPOを通じた「まちなじみ」を、クリティカルパスとして特定した。

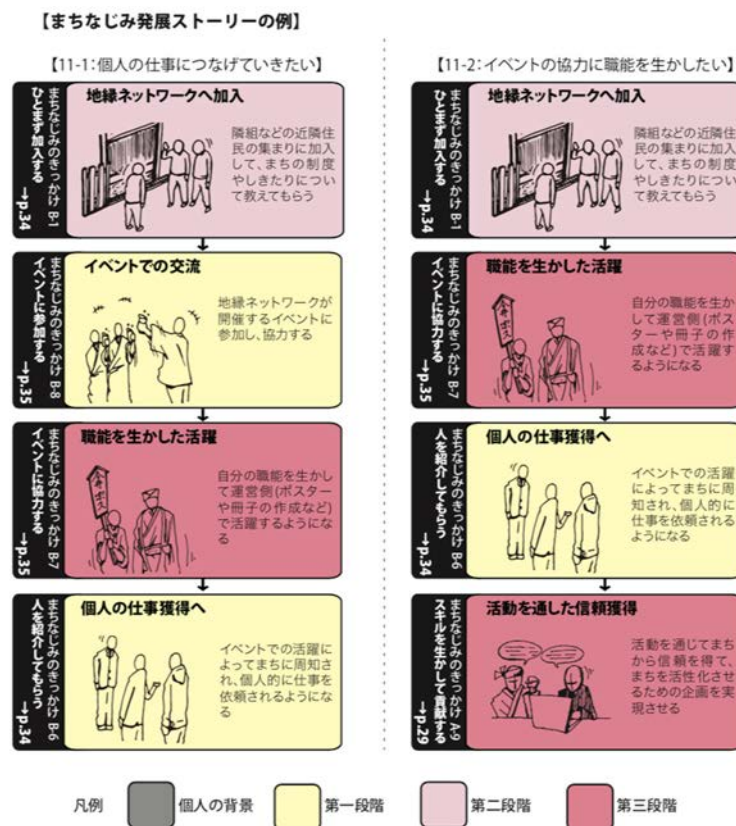


図6 整理した「まちなじみ」プロセスの例

実施項目③-2-1” : 「多世代共創型まちづくり」海外先進事例の調査・分析（台湾）

住環境向上にむけた公的助成事業でありながら、地縁組織のみ限らない人々の主体的参画も対象としていることが、創造的な人々・若年層の「まちづくり」への参画を促している。またそのことで、「地縁組織」の活動に柔軟性が増している。視察した事例（写真9、10）では「里」と呼ばれる地縁組織がOpen Green事業をきっかけとして、公園のデザイン、地域散策のガイド、市民農園の運営、さらに「里」の区域をまたいだ連携へと活動内容が派生していた。つまり従来の地縁組織<社区>だけでは補

えない活動力、創造性、柔軟性を＜社群＞が補完し、若年層の参画を促進するという効果が見られるということが分かった。



写真9、10 Open Green事業の例

### (3) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

今年度の到達目標① 住民自治の土台となるオーラルヒストリーの編纂：計画通りオーラルヒストリーの編纂を実施すると共に、各家庭への配布を完了した。

今年度の到達目標② ICTを活用した独居等高齢者のための健康見守りシステムの開発：計画通りシステム開発を進めた。一方、これらシステムを住民に積極的に利用してもらうための運営体制構築は今後の課題である。この点について、当初予定していなかったものの実施することができた台湾の事例は非常に示唆的であった。

今年度の到達目標③ 空き家の適切な利活用促進のためのTMO設立：計画通り空き家実態調査、TMO設立準備、インフィルを進めた。また当初予定していなかったが、アクティビティ調査、「まちなじみ」調査、台湾視察を実施した。このことで特に、＜社区＞＜社群＞という多世代の担い手構築に関する重要な知見を得ることができた。

そのほか、来年度以降具体的に着手する「医大生まちづくり組織設立」に関しては、その準備段階として、先行して研究推進拠点を活用し医大生のまちづくり活動を支援することができた。

## 2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- ＜社区＞＜社群＞という分類の有用性を調査から把握したが、この概念を、並行して設立準備を行っている重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立や、早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室を拠点とした「いい（医／居）場所づくり」に活用している。具体的には、TMO設立メンバーに積極的に＜社群＞として地域外住民を巻き込み、また「いい（医／居場所）づくり」においても「漢方」「癒やし」などをテーマとして、地縁組織に限らない幅広い人々を巻き込んでいる。
- オーラルヒストリー調査成果の活用方法については、地元住民と検討を進めており、

積極的な反応を得ている。

- 「まちなじみ」ワークショップでは、「まちなじみ」調査の成果を基に、ロールプレイングによって<社区>、<社群>の人々が、普段と異なる立場に立ってお互いのことを考えるというプログラムを試みた。このことで<社区><社群>の相互理解が深まり、ハイブリット型のまちづくり活動が進むことが期待される。また調査成果は今後冊子化し一般公開する。

### 3. 研究開発実施体制

#### (1) オーラルヒストリー編纂グループ

- ①後藤春彦（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②オーラルヒストリー調査、オーラルヒストリー編纂

#### (2) 健康見守りシステム開発グループ

- ①細井裕司（奈良県立医科大学・理事長兼学長）
- ②高齢者健康見守りシステム開発、ヘルスリテラシー・セルフメディケーション向上

#### (3) 重伝建版TMO設立グループ

- ①有賀隆（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②空き家の悉皆調査、重伝建版TMO設立

#### (4) 今井町アネックスPJ推進グループ

- ①山村崇（早稲田大学大学院創造理工学研究科・助教）
- ②今井町アネックスPJハード事業およびソフト事業

#### (5) 学生まちづくり組織設立グループ

- ①森本章倫（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②学生まちづくり組織設立（チームPREドクターズ）

### 4. 研究開発実施者

#### オーラルヒストリー編纂グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部 建築学科	助教
山田宮土理	ヤマダ ミドリ	近畿大学	建築学部	助教



岡村 竹史	オカムラ タケン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	次席研究員
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	建築学科	M2
劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	建築学科	M2
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	M1
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	M1
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	M1
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	M1
李 蔚	リ ウェ	早稲田大学	建築学科	M1

健康見守りシステム開発グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
細井 裕司	ホソイ ヒロシ	奈良県立医科大学	—	理事長兼学長
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部 建築学科	助教
岡村 竹史	オカムラ タケン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	次席研究員

林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	建築学科	M2
劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	建築学科	M2
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	M1
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	M1
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	M1
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	M1
李 蔚	リ ウェ	早稲田大学	建築学科	M1

重伝建版TMO設立グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
有賀 隆	アリガ タカシ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部 建築学科	助教
佐藤 宏亮	サトウ ヒロスケ	芝浦工業大学	工学部建築工学科	准教授
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
山田宮土理	ヤマダ ミドリ	近畿大学	建築学部	助教
岡村 竹史	オカムラ タケシ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	次席研究員
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手

高嶺 翔太	タケミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	建築学科	M2
劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	建築学科	M2
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	M1
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	M1
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	M1
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	M1
李 蔚	リ ウェ	早稲田大学	建築学科	M1

今井町アネックスPJ推進グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部 建築学科	助教
細井 裕司	ホソイ ヒロシ	奈良県立医 科大学	—	理事長兼学長
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理 工学研究科	教授
佐藤 宏亮	サトウ ヒロスケ	芝浦工業大 学	工学部建築工 学科	准教授
岡村 竹史	オカムラ タケシ	早稲田大学	医学を基礎と するまちづく り研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎と するまちづく り研究所	次席研究員
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎と するまちづく り研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎と するまちづく り研究所	研究助手
清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	建築学科	M2
劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	建築学科	M2
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	M1

本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	M1
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	M1
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	M1
李 蔚	リ ウェ	早稲田大学	建築学科	M1

学生まちづくり組織設立グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
森本 章倫	モリモト アキノリ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
岡村 竹史	オカムラ タケシ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	次席研究員
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
高嶺 翔太	タケミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
清水 有愛	シミズ アリア	早稲田大学	建築学科	M2
劉 冬晴	リュウ フユミ	早稲田大学	建築学科	M2
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	建築学科	M1
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	建築学科	M1
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	建築学科	M1
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	建築学科	M1
李 蔚	リ ウェ	早稲田大学	建築学科	M1

## 5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

#### (1) 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
H29/5/23	「健康まちあるき ラリラー」@着 物でジャズ 2017	橿原市今井町称念 寺および「早稲田 大学医学を基礎と するまちづくり研 究所今井町分室」	市内外から大勢の来訪 者があった。また奈良 立医大生「東洋医学研 究会」とコラボし、健 康チェックなどの企画 を実施した。	約 50 名
H29/7/22	今井町学習相談室	早稲田大学医学を 基礎とするまちづ くり研究所今井町 分室	奈良医大生「チーム PRE ドクターズ」との コラボによって、学習 相談会を実施した。	5 名
H29/10/23	「奈良県立医科大 学今井町ゲストハ ウス」「早稲田大 学医学を基礎とす るまちづくり研究 所今井町分室」開 所式および内覧会	橿原市今井まちな み交流センター 「華薨」および 「奈良県立医科大 学今井町ゲストハ ウス」、「早稲田 大学医学を基礎と するまちづくり研 究所今井町分室」	森下豊橿原市長および 奈良県医療政策部から の来賓祝辞では研究へ の強い期待が示され た。当日の様子は奈良 テレビでも放映され た。	約 40 名
H29/10/29	「アロマ・生薬に よるいやし」	早稲田大学医学を 基礎とするまちづ くり研究所今井町 分室	奈良医大生「東洋医学 研究会」とのコラボに よって、健康茶試飲や アロマスプレーづくり 体験など実施。	約 30 名
H29/11/5	「白樫生祭 2017」	奈良県立医科大学	奈良県立医科大学学園 祭にて、早稲田大学医 学を基礎とするまちづ くり研究所協力の下、 地元事業者、学生団体 の連携による「今井健 康カレー」を提供。	約 100 名

## (2) 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
H30/2/18	まちなじみワークショップ	橿原市今井まちなみ交流センター「華薨」	まちなじみ調査分析結果を受けて、その内容を精査するとともに、活用方法を検討した。	30名
H30/2/19	まちなじみワークショップ	橿原市今井まちなみ交流センター「華薨」	まちなじみ調査分析結果を受けて、その内容を精査するとともに、活用方法を検討した。	20名

## (3) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・「今井町 暮らしの記憶の口述史 ―受け継がれる多世代の思い出―」、早稲田大学 医学を基礎とするまちづくり研究所+後藤春彦研究室、2016年2月（配布は2017年度）：対象地在住世帯への全戸配布により、多くの住民に閲覧され、複数の住民から好意的なコメントが届いている。

## (4) ウェブメディアの開設・運営、

- ・医学を基礎とするまちづくり研究所、<http://pi-mbt.wixsite.com/home>：多言語対応しており、アメリカ、台湾、オーストラリア、欧米諸国などからも閲覧が有る。  
2016年立ち上げ。  
(サイト名、URL、立ち上げ年月、反響等)
- ・医学を基礎とするまちづくり研究所FACEBOOK、  
<https://www.facebook.com/PIMBT/>、2016年立ち上げ。
- ・医学を基礎とするまちづくり研究所 今井町分室FACEBOOK、  
<https://www.facebook.com/PIMBTAnnex/?fref=ts>、2016年立ち上げ。
- ・動画「今井町分室開室のお知らせ」、  
[https://www.youtube.com/edit?o=U&video\\_id=j8KTbqiMQqw](https://www.youtube.com/edit?o=U&video_id=j8KTbqiMQqw)、2017/04/24 17:49
- ・動画「ひとも元気にまちも元気に ―2016年11月14日 「医学を基礎とするまちづくり (MBT) コロキウム」講演」、  
[https://www.youtube.com/edit?o=U&video\\_id=tOPtWR3nJak](https://www.youtube.com/edit?o=U&video_id=tOPtWR3nJak)、2017/04/28 11:05
- ・動画「【開所式・内覧会開催】奈良医大今井町ゲストハウスおよび早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」、<https://youtu.be/lashn9smmm0>、2017/11/15 10:02

## (5) 学会 (5-3. 参照) 以外のシンポジウム等への招待講演実施等

- ・日本都市計画学会座談会「少子高齢化社会の多様な働き方・暮らし方を支援するまちづくり」、2017年10月、日本都市計画学会会議室、参加者：後藤春彦、園田眞理子、藤井多希子、東恵子（「都市計画」誌、2018.1.所収）
- ・早稲田大学研究ブランディング事業キックオフシンポジウム、「人も元気に、まちも元気に」、2018年2月27日、早稲田大学西早稲田キャンパス63号館

- ・ 社区交往 (International Workshop of Placemaking)、「Medicine-Based Town」、2018年3月13日、台北医学大学、約30名参加

## 5-2. 論文発表

(1) 査読付き ( 0 件)

●国内誌 ( 0 件)

●国際誌 ( 0 件)

(2) 査読なし ( 2 件)

- ・ 「分かち合える価値を内包する都市像をめざして~多様性の保護と包摂~」、後藤春彦、都市計画 (日本都市計画学会)、vol.67 No.1、pp.30-33、2018.1
- ・ 「担い手不足、超高齢化、ダブルケア社会におけるまちづくりの役割」、後藤春彦・園田真理子・藤井多希子・東恵子、都市計画 (日本都市計画学会)、vol.67 No.1、pp.20-29、2018.1

## 5-3. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(3) ポスター発表 (国内会議 1 件、国際会議 0 件)

- ・ 後藤春彦 (早稲田大学)、空き家活用によるまちなか医療の展開とまちなみ景観の保全、公開シンポジウム『多世代による地域資源のつながりとおしと文化多様性・SDGsの実現に向けて-』 (主催: 国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター)、京都国立博物館 平成知新館 講堂、2018年3月2日

## 5-4. 新聞報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 ( 0 件)

(2) 受賞 ( 0 件)

(3) その他 ( 1 件)

- ・ 「奈良県立医科大学今井町ゲストハウス」「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」開所式および内覧会 (奈良テレビでの放映、2017/10/24、[https://www.youtube.com/watch?v=JaDx\\_FxP0wg](https://www.youtube.com/watch?v=JaDx_FxP0wg) にて公開)

## 5-5. 知財出願

(1) 国内出願 ( 0 件)